

わが国におけるユタヤ教・イスラーム認識の諸相(1)

塩崎幸雄

1 虚ろな闇の脅威

……大なる勝利は大なる危険である……。人間の天性にとつて敗北よりも勝利に耐えることの方が困難である。いやそれどころか、勝利の結果から一層重大な敗北が生じてこないように勝利に耐えることに比べれば、かかる勝利をかちとることは極めて容易であるように思われる。フランスとの最近の戦争がドイツに残したすべての悪しき結果のうちおそらく最悪のものは普及した、いな、一般化した誤謬、すなわち、ドイツ文化もまたあの戦争で勝利を取めた、それゆえにかくも異常な出来事と成果にふさわしい花環でもって今や飾られなくてはならぬという、世論および世論的に考えるすべての人々の誤謬である。この妄想は極めて有害である。といつのは、これが一つの妄想であるからではない、なぜなら、極めて有益な極めて多幸な誤謬も存在するから、そうではなくして、これによって、わが国の勝利を完全な敗北に変ずること、すなわちこの勝利を「ドイツ帝国」のおかげで「ドイツ精神の敗北、いな、根絶に変ず

ることが可能となるからである。(フリードリヒ・ニーチェ『時代の考察』「小倉志祥訳、『ニーチェ全集』第四巻、理想社、昭和五十五年」九頁)

濠塵を捲き上げて迸落する世界貿易センターの映像を目にして筆者が最初に懐いた感慨は、この瞬間に快哉を叫びたる数億の諸国民がこの地球上には確乎として存在するのだ、というものであった。おりしも現地に居合わせた沖繩担当大臣某がカメラを前にして、聞く者になんらの印象をも与えぬようなコメントを発していたことは、現時日本政府の無能低劣ぶりを遺憾なく露呈してあまりあるのである。他でもない蹠躡に喘ぎつつある沖繩を受け持つこの者が、この日この時に暴虐に泣いている民衆の表情を代弁して、日米の耳目を啞然墮若たらしめる言辞を放つことができないということがなにを意味するかについて、明察の士には多くの説明を要しない。

世界貿易センターに対する破壊行為を、日本軍による真珠湾攻撃に比した評者がいたが、それをあながち不当な擬定と

も思えぬと感じた者は筆者はかりではないであろう。この比定を基として、カプトル陥落までのアフガニスタン攻略戦の数カ月から、昭和十六年十二月より昭和二十年八月までの三年九月へと連想を働かせることは甚だ容易なことである。このふたつの戦争が要した歳月の長さの違いに、米軍の脅威の進歩増大を見るか、あるいは米国に敵対したものの戦力の優劣を見るかは、さして問題とするところではない。敗戦した両者の信奉する事柄の違いはともかくとして、いずれも完全なる敗北を遂げたということに思いを致せば充分なのである。米国は勝利した。またしても勝利した。無敵のアメリカ合衆国は、翻翻とひるがえる星条旗のもと、将来もおまつるわぬものをやすやすと平らげ、凶々しき栄光ある鬻られた戦捷の歴史を刻みつけてゆくことであろう。

交戦時にあつて、アメリカ合衆国大統領ジョージ・ブッシュ二世がテレビのフットボールを観戦中、Pretzelなる菓子を咽喉に詰まらせて昏倒した、との報に接した。米国の国ぶりをなによりも象徴するこの一椿事に、世界数十億の視聴は何を思ったであろうか。いまだに忘れ去られざるかのお粗末極まりない、まるで一場の笑劇であるかの如き大統領選開票のありさまが、あらためて思い出だされたのではなかったか。Pretzelを詰まらせた愚かしいその同じ口先から、不朽の正義や十字軍などという響り昂ぶった不遜極まりない言

辞が臆面もなく吐き出されるとき、その発語は空回りして何人に対してもなんらの訴える効力を及ぼしえないのである。その空疎な掛け声に踊らされる者は、愚人にあらずんば狂者であろう。前掲のニーチェの言は、一八七一年の普仏戦争勝利に沸き返るドイツに対して発せられた警告の辞である。フランスをムスリムに、ドイツをアメリカに置き換えることにより、朽ちざる警醒の語となるのである。されど、ただ明らかに異なるのは、戦捷の結果もたらされる頹廢を憂うべき輝けるアメリカ精神などというものは露ほども存在しないということである。

アメリカはムスリム勢力に勝利した。圧倒的な軍事力をもつて有無を言わさぬうちに制圧しおおせた。だがそれはまことに空疎な勝利である。この勝利がアメリカの文化的優位を証しするものである、などという認識をもつことほど甚だしい誤りはないであろう。アメリカ精神がムスリム精神に勝利したのでは決してない。現代のアメリカは滔々千数百年にも及び誇るべき回教文化の伝統を凌ぐなものも持ち合わせてはいないのだ。全ムスリムが至純の熱誠をもって礼拝祈禱する静謐を湛える情景の対蹠者こそは、ほかでもないテレビのスポーツ観戦に浮かれ騒ぎ菓子を咽喉に詰まらせる愚劣極まりない国家元首を奉戴する国民なのである。プロテスタントイズムを呼号する大統領の滑稽極まりない雄姿に、分不相応

の虚勢を読み取ることは誰人をもなしうるところであろう。もはやワシントンやリンカーンのアメリカは遠く過ぎ去って返らないのである。クリントンやブッシュなどという稚気だけは人一倍のおどけた俳優めいた輩が万人の歓呼をもって国家元首として迎えられるアメリカ。衝動に憑かれた猛獣の如くに獣性を逞しくして、しかもまるでゲームに打ち興するが如くにチューイング・ガムを噛みながら情け容赦もなく無辜の民に絨毯爆撃を喰らわせつづけるアメリカ。自由と民主主義と永遠の繁栄の謳い文句の陰に、暴力と人種差別と金権魔者 とがほの見えているアメリカ。かかるおぞましきものと親縁性をもつ文化 などというものがおよそいかなる性質のものであれ存在しえようはずもないのである。

日本に対する勝利も同様であるが、アメリカは敵対国に比し、より非文化的で粗暴であつたからこそ勝利したのである。文明の覇者として、承認必謹を謳う日本の皇道精神をも、黄金時代の中世を夢見るタリバーンの信仰をも無残にも土器の如くに打ち砕き、蹂躪つたのである。現代はもはや信仰や文化が威光を放つ時代ではなくなりつつある。アメリカの如き反文化に徹せるカエサリスムの覇者のみが陽の当たる街道を堂々闊歩する世紀が到来するのであるうか。だがしかし、信仰と文化とを閉却せる者のゆくてに待つものは、衰亡のローマを回顧するまでも

なく恐竜の死の如き虚るな闇以外のなにものでもないのである。

九月テロの十数日前にイスラエルによるアラファト麾下の要人爆殺事件があつたことを記憶する読者は少ないであろう（八月二十七日、パレスチナにおいてアラファトに次ぐナンバー2の地位にあるとされていたパレスチナ解放人民戦線（PFLP）議長アフアリ・ムスタファアが爆殺された）。筆者はその報道を新聞紙上で知つたとき、随分と大胆な思い切つたことをするものだ、と感じたが、ついで起こつた世界貿易センターの一件は、周到かつ長期間の計画がなされていたとはいへ、この要人爆殺事件こそが直接の引き金になつたものと想像されるのである（また、九月三日、南アフリカ・ダーバンで行われていた国連主催の「人種差別反対世界会議」において、米国およびイスラエル代表団が、「シオニズムは人種主義」を意味する文言を盛り込んだ「政治宣言」採択に異を唱えて撤退したことも事件の一大要因であろう）。貿易センター破壊の指令を発した者が、オサマ・ビンラディンであるか否かは、同人の生死不明の現在にあつてはそれを特定する材料をもたないが、米国とともにイスラエルをも憎悪する者であつたことは確実であろう。貿易センターに狙いを定めた理由は、やはりそれが米国経済の象徴であり、それを破壊することにより決定的な脅威をアメリカに与えることにあつ

たとともに、米国経済界の指導的立場にあるユダヤ系企業に心理的に強度のダメージを与えることにあつたはずである。事件の首謀者は米国の親イスラエル政策を快く思つていなかった。同胞の愛すべきムスリム(パレスチナ人)がイスラエルの暴政によつて日々斃れゆくのを座視するに忍びなかつたのである。報復の方法は明らかに常軌を逸したものである。だが、カエサリズムの覇者に対し一矢報いんとしたその思いは、極度に追い詰められた者の絶望の淵から迸り出でた怒りに発するものではなからうか。かかる尋常ならざる手段は、退路を絶たれた絶望者にしてはじめて想到しうる発想なのである。あたかも日本の神風特別攻撃隊が未曾有の窮状の裡よりすべてをなげうち蠶雲をかきわけて群がり起これるが如く、かの死の旅客機 の操縦者たちは、決して狂信的歡喜をもつてではなくして、無念の涙を呑んで最後の一挙に身命を賭したのではなかつたか。

犯行の首魁は事件を契機としてムスリム諸国の総蹙起を期待したのである。だが、情勢は沈滞したままで推移し、常日頃反米強硬論を唱えていたサダム・フセインなども参戦するそぶりを見せることなく、米国の攻勢のうちにタリバン政権崩潰を迎えた。そのうち、イスラエルのパレスチナ人に対する攻撃は事件以前にも増して苛烈となり、本年春に入つて、パレスチナ自治政府議長府の爆撃破壊がなされるまでに

至つたのである。五月二日になつてようやく監禁から解放されたアラファト議長は、満面に怒りを表して各国報道陣に對した。

【エルサレム支局2日】現地からの報道によると、イスラエル軍がラマラの自治政府議長府から撤退した後の2日未明、議長府内に入った報道陣に、アラファト議長はイスラエルと国際社会への怒りをぶつけた。

「この残酷な犯罪に、どうして世界は黙つていられるのか。この部屋(議長府)が吹き飛ばされてもかまわないが、聖誕教会で起きていることが問題だ。この犯罪は許せない」。アラファト議長はふるえる声で語り、イスラエルに対しては「やつらはナチスだ。テロリストだ。人種差別主義者だ」と口を極めて非難した。(朝日新聞「二〇〇二年五月二日、夕刊第一面」)

「やつらはナチスだ」という言葉は、ユダヤ人に対する最大の痛罵の言である。アラファトの煮え滾る沸騰の如き怒りの口吻が、あたかも耳元に聞こえるかのよつである。また、「人種差別主義者だ」という言葉から思い出されるのは、一九七五年十一月十日に国連総会において採択された「シオニズムは人種主義である」とする決議案である。日本の代表は、この採択時に棄権したことであるが、イスラエルの人種主義的政策の横暴はこの二〇〇二年春の時点においては、なんらの疑問を差し挟む余地もなくまさに世界の衆目の認めう

るところであらう。

かの矢内原忠雄は「シオン運動（ユダヤ民族郷土建設運動）に就て」のなかで、以下の如く述べている。

……如何に現実的必要に出づるとはいへ、ユダヤ民族郷土は現住アラビア人を犠牲にして建てられるべき「権利」はない。原住民に対する政治的非搾取の原則に立ちてのみ、植民は國際正義の是認する処となる。バルフォア宣言にも「パレスチナ既存の非ユダヤ諸団体の政治的及宗教的権利を侵害せざる」となる但書があり、シオン主義者も近年つとめてアラビア人との平和的關係を高調するに至つた。モーゼに率ゐられてエジプトを出で、ヨシユアに率ゐられてカナンに侵入したるユダヤ人の祖先等は、先住諸種族を征服絶滅してその地に定住し、絶滅し得ざるに及んで之を奴隸化して従属せしめ、而して共居の歲月を経るに従ひ之と通婚しその宗教的社会的生活に同化するものを生じたるは歴史の示す処である。今シオン運動の標榜する処はユダヤ人の純粹なる非同化的固有社会の建設であり、同時にアラビア人に対する非搾取的非絶滅的共存である。それ故に両民族各自の自主的發展を保障しつゝパレスチナを共同郷土と為さんと言ふのである。若し之が政治団体としての自主的發展を意味するのならば、かくの如き發展の可能は疑はれねばならぬ。イングランドとアイルランドの如く又スウイス各カントンの如く地理的別々の領域を有する異民族がその自主的政治団体とし

わが国におけるユダヤ教・イスラーム認識の諸相（一）（塩崎）

ての發展を期しつゝ共同国家を形成せんことは必ずしも不可能ではないが、パレスチナに於けるが如く地理的單一領域の全部に亘りて混在する両民族にこの事を期待するは社会学的不可能であらう。一地域一政治団体。パレスチナは必ずや時日の経過と共にユダヤ人アラビア人を包容する一政治団体として發展せざるを得ない。たゞ文化団体宗教団体経済団体等としての自主及び地方行政上の自治は、統一的政治団体たる「パレスチナ国」の憲法の規定如何によりて保障せらるゝことは必ずしも不可能ではないのであらう。（矢内原忠雄「植民政策の新基調」弘文堂書房、昭和二年「九十九頁」百一頁）

昭和二年（一九二七）といへば、一九四八年のイスラエル建国を遡ること二十数年のパレスチナへのユダヤ人入植が軌道に乗りだしたところである。当時にあつても、ユダヤ人、パレスチナ人双方の角逐は絶えなかつたが、未来の「パレスチナ国」に向かつての相互歩み寄りの姿勢は強調されていたわけである。だが、決定的決裂をもたらしたのはいわゆる「独立戦争」（一九四八）におけるイスラエルによるパレスチナ全土武力強行制圧である。これ以後の中東における幾多の紛争は、事態をますます紛糾させるばかりだ、といつても過言ではない。

果たしてこれからどのような局面を迎えることとなるのかは予想の限りではないが、わが国とてこの世界の進運を前

にして無為等閑に過ごすことができようはずもない。現政権はこのたびのアフガニスタン戦争に際し、朝鮮戦争、ペトナム戦争時の如くアメリカに不即不離の態度をとりつつまたその特需景気にありつき不況を打開することを当て込んでいたのである。このようなことでは年来の米国の属州視に好餌を与えるにすぎず、満天下にこの上もない醜態を晒し恥辱を干載に遺すのみであらう。

わが国とイスラーム勢力、わが国とユダヤ勢力。わが国とこの二者との関わりは、一見無縁であるかに見えて、その実極めて特異な結びつきもつものである。明治以後、国際舞台への登場とともに両者との対峙を迫られた日本は、他に例を見ない独特の対処方針を講じて、外交を推し進めた。また一方、民間においてもさまざまな立場から両勢力に対する研究・接触がなされた。その間、民間勢力と政府との外政観上の齟齬なども見られ、さまざまな様相を呈していったのである。本稿では以下に、諸種の資料を通して明治・大正・昭和のわが国における対回教、対ユダヤ認識の流れを辿つてゆくつもりであるが、まずはその導入部として、日本人の心性「対ユダヤ感情」などにつき問題放出を試みたい。

2 苗を腐らせる沼

日本人は從來、ユダヤ、イスラーム双方に対し、内奥から

コミットすることがなかった。つまりそれらと信仰を共有することがほとんどなかったのである。ごく一部の少数の者がそれらの信仰に帰する例を見ないわけではないが、それは文字通り例外的なものにすぎない。この二大勢力に接触した日本人は、ほとんど自らとはなんらの共通点をもたない奇妙な存在として判断停止を選択するか、あるいは過剰な反応を惹き起こして、多数者から見れば特殊奇態ともいえる感情の持ち主へと変貌するかのいずれかである。それは、日本人特有の「大乗的」心性と真つ向から対立する峻烈な信仰の現実態から受ける衝撃によるものである。

……「この国は沼地だ。やがてお前にもわかるだろうな。この国は考えていたより、もっと怖ろしい沼地だった。どんな苗もその沼地に植えられれば、根が腐りはじめる。葉が黄ばみ枯れていく。我々はこの沼地に基督教という苗を植えてしまった」……「私にはだから、布教の意味はなくなっていた。たずさえてきた苗はこの日本とよぶ沼地でいつの間にか根も腐っていた。私はながい間、それに気づきませず知りもしなかった」……

「切支丹が亡びたのはな、お前が考えるように禁制のせいでも、迫害のせいでもない。この国にはな、どうしても基督教を受けつけぬ何かがあったのだ」(遠藤周作『沈黙』「新潮文庫、昭和五十六年」百八十九頁百九十五頁)

転向者フェレイラの漏らす述懐は、いつの世の日本人にもあてはめうるものである。新旧両教伝道については暫く措く。基督の福音同様啓典の民の奉ずるところである猶回両教においても、日本人の心性に根づくことはなかつた。日本人にとつてそれらは大抵の場合珍奇な研究対象以外のなにもでもなかつたのである。それらの教えが要求する日常生活上の厳格な行儀規範、食事規定についても、その内奥の意味するところを捉えうるに至るには、あまりに日本人の生活意識は融通無礙でありすぎた。絶対者 超越者 を理解するに至るには、あまりに日本人の来世観、救拯観は世俗的で利他的短絡的でありすぎた。

日本人は浅い民である。彼等は喜ぶに浅くある、怒るに浅くある。彼等は唯我を張るに強くあるのみである。忌忌しいことは彼等が怒る時の主なる動機であつて、彼等は深く静に怒ることが出来ない。まことに彼等の或者は永久に深遠に怒ることの如何に正しい神らしい事である乎をさへ知らない。故に彼等の反対は恐ろしくない。彼等が怒りし時には、怒らして置けば其れで宜いのである。電気線が其貯蓄せる電気を放散すれば、其後は無害に成るが如くに、日本人は怒る丈に怒れば、其後は平穩の人と成るのである。若し外国人が日本人の此心理を知るに至らば、彼等は日本人を扱ふの途を知つて彼等を少しも恐れなくなるであらう。此点に於て日本の社会主義者も無政府主義者

わが国におけるユダヤ教・イスラーム認識の諸相(一)(塩崎)

も恐るゝに足りない。抵抗せずして放任して置けば彼等の熱心は暫時にして醒めるのである。日本人は牡羊と同じく唯正面より反抗する時のみ強くある。後方より情実を以て押す時は御すこと至つて容易である。而して此は実に歎かしい事である。

De profundis と稱へて深淵の底より湧出る喜と悲と怒とのなき民は浅い小なる民である。彼等の中より偉大と稱すべき何物も起らない。深く怒らざる者にキリストは勿論のこと、エレミヤもダンテもミルトンもワルツワスも解らない。而して人を深くする者にして聖書の教の如きはない。イスラエルの民がモーセ及び其他の預言者等に由て深くせられたるが如くに、彼等の言を収むる聖書が基督教国の民を深くしたのである。欧米人よりイスラエルの人の感化を取除いて彼等も亦日本人同様に浅い民である。「深淵 深淵に応ふ」と彼等の詩人は歌うた(詩篇四十二篇七節)。人は何人もエホバの神に深くして戴くまでは浅い民である。歐洲にニイチエのやうな基督教に激烈に反対する思想家の起つた理由は茲に在るのである。彼等は基督教に由て深くせられて、其深みを以て基督教を嘲けり又攻撃するのである。東洋の儒教や仏教を以てしては到底深い人間を作ることが出来ない。(内村鑑三「浅い日本人」、『内村鑑三全集』(四十巻本、岩波書店)第二十八巻、二百一―二百一頁)

右の内村の言ほど、世界の潮流から隔絶した汎神教の微温湯に安住せる日本人の浅薄さを的確に言い表した論評は他に

例がない。日本人の浅薄さの因由は、地理的にユーラシアの辺陲に位置し、外敵を斥けること甚だ容易であつたこと、氣候温暖で他国に比し豊富な農作物、海産物に恵まれ労少なくて安穩に生活しえたこと、鎖国政策を長年月にわたつて保持し外来思想の流入を最小限に止めていたことなどの外的条件に求めむべきではない。日本人の心が、深き教えを欲しなかつたのである。だがしかし、日本人は試練を知らぬ民なのであろうか。暖衣飽食すれば事足れりとする民なのであろうか。麵麩を口にしさえずれば、神の言葉を求めぬ民なのであろうか。世界的潮流であるユダヤ・キリスト・イスラームの教えに陋固として耳傾くることなき民なのであろうか。かかる問いかけ自体が、徒事に属することなのであろうか。

維新以前の鎖国時代と、鎖国の籬が取り払われた維新以後の近代日本とを見較べるとき、確かに維新以後におけるほうが外来思想との接触の場面の夥しさについては比較にならぬほど頻繁となつた。にもかかわらず、現代においてもなお日本人の大半は世界的潮流であるところのユダヤ・キリスト・イスラームの教えに内奥からかわることなく一生を終えてゆくのである。神を信ずるためには、きわめて老獪でなければならぬと唱える『タルムード』の教えの対極者としての日本人は、昂然と神を欲しないためには、きわめて汪洋

自恣でなければならぬと放言して憚らない。日本人にとつては、信仰など世迷い言にすぎないのである。ほかでもない、日本人の心が、深き教えを欲しないのである。日本はいまだに、苗の根を腐らせる沼地なのである。改めていつまでもなく、国家が基督教国であるか否か、国教がイスラームであるか否かなどが重要なのではない。日本民族は總体として深き教えを欲しない民族なのである。

来る日も来る日もテリラのしつこい質問に悩まされるサムソンはそれに耐えられなくなつて「死ななばかり」の状態になっている(土師記一六・一六)。その異母姉妹タマルを思い焦がれるアムノンは自分でもほんとうに病氣だと感ずるほどである(サムエル記下二三・二)。お預けになつたままの希望は心を病気にさせ(箴言二三・一二)、胸の中の苦しみは骨まで枯らせる(箴言一七・二三)。實際、神ですらこの感情の激しさや変化からは自由ではないのだ。預言者が神に自分は頼みもしなかつたよつな仕方では礼拝されることにはもうあきあきして我慢できないと言わせているところがあるが(イザヤ書一・一四)、上のような感情を表現するにはこれでもまだ最も強いものとは言えない。だれでもあのエレミヤの嘆きやヨブの訴えを深く見つめるなら、激しやすい魂の爆発としてこれ以上強烈なものないことを知るであらう。

このように全体を通じて言えることは、猛烈な激情性と鋭い

感受性とがヘブライ人の精神生活の特徴だということである。彼の生活に対する接し方は新鮮で、情熱的で、ほとんど束縛を離れたところがない。(ルートヴィヒ・ケーラー (Ludwig Kohler) 『ヘブライ的人間』池田裕訳、日本基督教団出版局、一九七〇年、百四十―百四十一頁)

かくの如き激情の猛威は、わが国古代人の心性にあつても容易に発見できるものであり、決して、ヘブライ的人間、固有のものではない、現にわが国の神話を記す『古事記』『日本書紀』においても散見されうるではないか、との疑問をもたれる読者もあるう。確かに諾再二神の黄泉比良坂における争いや素戔嗚尊の狂乱などに古代の神々の激烈な感情の迸りをみることは可能であろう。だがしかし、そのような感情の亢奮と我を忘れた執着とを、わが民族が、絶対者、対人間という相のもとに描き出すといふことは決してなかつたのである(しかもなお、青人草の起源と意義とを明確に表示する記述すらわが国の神話中に見出たすことは不可能なのである)。絶対者 と対峙・抗争することなき民は浅い小なる民である。絶対者 に抗うことがなかつたといふことは、とりもなおさず、絶対者 を思うことがなかつたといふことなのである。日本民族の浅薄さの根源には、牢固として抜くべからざる頑迷ともいふべきかかる 絶対者 觀念の欠落があり、つまりは 信仰 意識の希薄さが存在しているのである。

わが国におけるユダヤ教・イスラーム認識の諸相(一)(塩崎)

3 反ユダヤ という感情

選民 という民族的優越觀念の来歴を確認する作業は、たとえようもない困難を伴う難事業である。『旧約聖書』を繙くまでもなく、それはユダヤ人の民族精神の基盤であり、なおかつ現代までこの民族を存続せしめたもつとも重要な拠り所である。ユダヤ民族はその選ばれし民という鞏固な矜持とそれに基づく幾多の辛抱強き闘争の歴史とをもつて、他民族をしてあるいはとめどなき絶讃の言を吐かしむるに至らせる一方、消し去りがたき憎悪の念をかき立たしむるのである。神によつて選ばれた唯一の民族である、と自負することが、そつではない民族に与える影響は至極単純なものであり、絶讃と憎悪というふたつの相対立する感情を生み出すのみである。およそこの民族の動態に接する隣接民族にとっては第三の感情はありえない(tertium non datur)。ユダヤ民族は、おのが熱情をもつて隣人をして平靜ならせらしめずにはおかない 宿命の民なのである。

選民 ユダヤ民族が、非ユダヤ民族に対していかなる觀念を懐いているのかを明示する資料は乏しい。しかも、ユダヤ人自身の手によつて、自民族が古来より有した対非ユダヤ人觀を冷靜に記述したものを探し出すことは極めて困難なことである。したがって、ユダヤ神秘思想の研究者であり英国

マンチェスター大学で教鞭を執るユダヤ人アラン・ウンターマン(Alan Unterman)による次に掲げる幾行かは、ユダヤ民族の「選民的矜持の裏面を知るための貴重な研究成果なのである。

中世のユダヤ教神学者たちの間では、ユダヤ人と非ユダヤ人との相対的な位置づけに対する関心よりも、キリスト教、イスラームに対してユダヤ教教義の真理を提示しようとすることへの関心の方が大きかった。だが最も著名な例外は、イスラエルが他の民族とは霊的構造を全く異にしていることを、その著『クザリ』の中で論じたユダ・ハレヴィである。個々のユダヤ人は、神の心や意志を知ることのできる唯一のものとして預言者の資質を伝承している。しかし、非ユダヤ人は改宗(ユダヤ教への改宗 引用者注)したとしてもユダヤ人になった時点でこの資質を獲得することはない。今日風に表現するならば、彼は生まれながらのユダヤ人がもつ「霊的遺伝子」を欠いているからである。

ゴイ(非ユダヤ人 引用者注)に対するタルムード的反感
は、中世以降の神秘主義的文獻、ことにゾハールやルリアの力バラの中にさらに激しい形で見いだされる。ここでとり上げられているのはタルムードにおける場合とは異なって、非ユダヤ人の慣習の問題よりも、むしろユダヤ人と非ユダヤ人との本質上の相違である。タルムードがゴイの倫理的霊的生活、モラ

ルの欠如、地上的なものの超越への反感、神についての無知などを中傷しているように思えるのに対して、カバラは種の違いとして、この相違を扱っている。

ゴイはカバラの説く悪魔的な下位世界に属する存在である。彼らは、少なくとも神的な次元に到達する潜在性をもつユダヤ人より低次の魂の所有者である。イヴは邪悪な蛇のために妊娠させられ、このために彼女の子孫は、シナイにおいて神が現われイスラエルからその穢れを取除くまで、穢れを身に負っていた、というタルムードの先例的解釈に基づいて、神秘主義者は独自の原罪論を教示した。ゴイは悪魔的力の象徴である蛇と肉体的に通じた女性が産んだ穢れた子供とされた。非ユダヤ人は、神のトーラーの啓示という潔めの体験を経ていないので、半人半悪魔的存在のままに留まっている、という。

カバラの図示的象徴主義のゆえに割引いたとしても、なおこの思想はユダヤ人と非ユダヤ人の間に埋めたい溝を築くものであり、ユダヤ教への改宗の観念すべてを疑わしいものにする。ハラハー(ユダヤ教を奉ずる者の日常行動を律する規範 引用者注)は改宗者を一人前のユダヤ人と認めているのである。それではしかしどのようなようにして、回心がこの非ユダヤ人の本質的な構造に変革をもたらすことができたのであるのか。ユダヤ人が所有している靈魂には劣るが、天から新しい靈魂が賦与されたものとして改宗者を理解することで、ゾハールはこの問題

を解決している。他のカバリストたちよれば、非ユダヤ人の改宗者はすでにユダヤ人の靈魂を有していたのだが、ユダヤ人であつた先祖が非ユダヤ人の間で強制的に洗礼（無論、キリスト教会における洗礼 引用者注）を受けさせられたことによつて、そのユダヤ人の靈魂を見失つていたものである、とする。改宗は現実的には、一ユダヤ人が群れに立返ることを意味していた。改宗者をユダヤ教に連れ戻したのは内に潜んでいたユダヤ人の火花である。

ユダヤ人と非ユダヤ人の区別を最も明確に表現しているのは、おそらく一八九世紀におけるハスイディズムの指導者リアデイのラビ・シユヌール・ザルマンが世に送つた著作においてである。彼によれば、ユダヤ人は誰でも動物靈魂と神的靈魂の二つをもつ。動物靈魂は悪魔的なものに到達する最高段階から生じたものであつて、惡の根源であると同時に、慈しみや親切心といった自然の善の根源でもある。悪魔の構造が聖なる側に最も近いところ すなわち「光の殻」にその根をもっているからである。神的靈魂は神に根をもち、ある意味では神の一部である。非ユダヤ人は神的靈魂を欠いているばかりではなく、その動物靈魂もユダヤ人のものより低次の段階から生じたものである。（ウンターマン『ユダヤ人 信仰とその生活』石川耕一郎＋市川裕訳、筑摩書房、一九八三、三百十九～三百二十一頁）

わが国におけるユダヤ教・イスラーム認識の諸相（一）（塩崎）

如上の記述が物語るものと、アーリア神話 すなわちナチス的人種思想との懸隔は極めて僅かではない。さきに掲げたアラファトの「やつらはナチスだ」との発言は、このよつなユダヤ人の対非ユダヤ人認識に対する指弾を含蓄するものとして理解すべきであろう。かかる生物学的優越觀念こそが反ユダヤ感情惹起の最大要因なのである。

いわゆる基督教圏、イスラーム圏に属する諸民族は、本能的にはユダヤ人と同様ヘブライズムを奉ずるものであり、極言すれば 信仰 の根を同一とするものと呼ぶことが可能である。また、基回兩教圏の諸民族においては、信仰 の根を同じくするユダヤ民族に対し、極度の畏敬尊崇の念を懐いている場合が多く見受けられる。それは、『旧約』の民であるイスラエル民族、啓典の民の最先達としてのユダヤ民族に対する無上の尊崇畏敬の念の表出なのである。ユダヤ民族の苦闘の歴史に絶讃の辞を惜しまない者が他民族中より絶えないのは、かかる純乎たる尊崇の心情のしからしむるところなのである。単なる同情や親愛の念などではない。『聖書』に記された神の鍾愛の的であるイスラエル民族の果敢かつ瞻目すべき事蹟の夥しき事例が、かれらをしてユダヤ人を讚美せしめずには措かないのである。つまり、かれらはユダヤ人とともに 信仰 の根を同じくするのみならず、ユダヤ人の 選民 意識をも共有しているわけなのである。

これはなんら奇妙なことではない。『聖書』に習熟すればするほど、かかるユダヤ選民観への浸潤は激みなく凝滞なく行われるはずである。基督の放つ言葉からも、イスラエル優越の思想はあらゆる場面で容易に探し出だしうるものであり、またかの『コーラン』においてすらイスラエル尊崇の言辞を探し当てることはなんら困難なことではないのである。

イスラエルの児等よ、汝等に垂れたる吾が恩寵と、万民に優りて汝等を選べることとを念へ(牝牛章第二百二十二節、大川周明訳『古蘭』岩崎書店、一九五〇、三三頁)

吾はイスラエルの民を差すべき懲罰より救へり 吾は彼等をフアラオより救へり。げに彼は背逆にして暴戾なりき 吾はこゝとさらに万民を超えて彼等を選びたり 而して明白なる試験を含む諸の休徴を彼等に与へたり(煙氣章第三十一、三十三節、同書六百六十四頁)

啓典の民たちは、イスラエルの民を掛け値なしに讚美してやまない。それは、彼らがイスラエルを 選民 と定めた神の前に一樣にひれ伏すがためにほかならない。

だがしかし、ひるがえって 反ユダヤ 感情というものにも思いを致してみると、如上のイスラエル尊崇感情と 反ユダヤ 感情との間にいかなる関わりが存在しているのかについて疑問を生ぜざるをえないのではなからうか。

ここで注意を促しておきたいのは、畏敬と憎悪との二種の

感情が、まったく別種のものであるのではなく、不二一体のものであるということである。非ユダヤ人は、ユダヤ民族を驚異讚歎しつつも、侮蔑憎悪しているのである。また逆に、唾棄排斥しつつも、羨望感歎しているのである。なぜならば、非ユダヤ人は、ユダヤ人ではないからである。いかに『聖書』の教うるところの卓抜なるイスラエル民族の行状を讚仰欣慕しようとも、神に寵愛せられたるイスラエルの 選民 でない者は、イスラエルに臣従する立場より脱することはできないのである。いかに 信仰 を研ぎ澄まして、日夜、神に対する讚美と感謝とに明け暮れようとも、神によりて 選民 の冠を授けられざる者は、イスラエルの棄て置いた残杯冷炙に甘んじなければならぬのである。いかに熱誠を奮って十戒の示すところを遵奉し、山上の垂訓の実践に執掌尽瘁厭くことなからうとも、非ユダヤ人にとっては磐石のイスラエル 選民 観を覆すすべは講じようもないのである。このような煮詰められたるが如き非ユダヤ人の苦衷を理解してこそはじめて世界各国を席捲する 反ユダヤ 感情というものを論ずる用意ができるのである。

反ユダヤ感情と親ユダヤ感情とは、 信仰 をもつ者のなかで確乎として同居するひとつの感情なのである。それは 信仰 と無縁の者には想到しようもないきわめて複合的な感情である。

信仰 を没却したユダヤ人研究というものは、単なる火遊びにすぎない。信仰 を有せざる者にとっては、ユダヤ民族なるものの内実も、反ユダヤ感情の深部も決して知ることはできない。人はユダヤ人であるか、あるいはユダヤ人ではないかのいずれかである。選民 であるか、選民 ではないかのいずれかである。その事実から逃れうる者は、どこにも存在しないのである。逃れているかに錯誤しているのは、客観的態度 などというおおよそありうへからざる夢想的姿勢をもって研究の真似事に勤しみ、信仰 を棚上げして、筆端口頭のみでユダヤ民族の 信仰 を論じたり、信仰 より発する反ユダヤ感情をあげつらおうとする徒輩である。かかる 客観的態度 などというものは、当人の予期せぬことながら一箇の体のよい、しかも極めて危うい反ユダヤ主義以外の何物でもない。なぜなら、ユダヤ人の 信仰 を単なる珍奇な 研究対象 として扱い特異な 宗教現象 とみなすことは、至心より折るユダヤ教聖職者に対する冒瀆であるからである。彼らラビたちはイスラエル 選民 觀念の鞏固なる保持者である。客観視 などという操作からは、選民 觀念をめぐるあらゆる事柄はこぼれ落ちてゆくであろう。他でもない 選民 という觀念は、客観的態度 を堅持する半ジャーナリストたちにとっては唾うべき滑稽な素材以外の何物でもないはずである。客観的態度 を弄する者にとつ

わが国におけるユダヤ教・イスラーム認識の諸相(一)(塩崎)

ては、選民 などどこにも存在しないはずだからである。信仰 を有しない者は、信仰 の周囲よりよろしく立ち去るべきであろう。信仰 なき者が、信仰 を論ずることは極めて不謹慎かつ危険なことである。学問的自由と畏敬すべきものに対する蹂躪とをはき違えているのである。信仰 の自由などと称するものがたとえありえたとしても、無信仰 の自由などというものはおおよそ疎ましい蔑むべきものである。

イスラエル駐在の朝日新聞特派員である江木慎吾は、ガザにおいて一パレスチナ人女性に対してインタビューを試みた。いわゆる「自爆テロ」についての意見を求めるためである。

穏やかな笑みを浮かべながら、彼女は質問に答えた。しかし、質問しても、「紛争の本当の原因に目を向けてください」という、ふんわりした答えしか返ってこなかった。彼女の立場で言えば、イスラエルによる占領こそが問題の根源であり、そこから目をそらし、「殉教攻撃」の新傾向を論じるのは意味がない、ということらしい。「私だつて親を殺され、兄弟を殺されたらわかりませんよ」と笑みを絶やさず彼女は話した。

礼を言つて席を立つと、「お会いできてよかったです。またぜひいらして下さい」と彼女は右手を差し出した。軽く握ると、全く握り返してこない。まあ、それはいい。この女性は、握

手にほとんど力を入れないから。

彼女の左手に目がいった。途端に、彼女の笑みが仮面に過ぎず、取材の中身に激しく反発しながら、表情に表さなかつただけだと悟った。そこには、取材の冒頭に渡した名刺があつた。握りつぶされて、くしゃくしゃになつていた。(江木慎吾「つぶされた名刺」『朝日新聞』二〇〇二年五月二十一日、朝刊第六面「特派員メモ」)

信仰 の熱戦場にあつて、腐れる沼地 からやつてきたこの一日本人ジャーナリストは、肝心要の事柄をなにも把持することができない。パレスチナ人の冷笑の真の意味すら解せず、間の抜けた報告を本社に送り、麗々しく署名入りで記事に仕立てて済ましている。信仰 に生きる者は、かかる軽佻浮薄な操觚業者に対してのみならず、いわゆる 宗教学者 宗教研究者 宗教愛好家 などという不謹慎極まりない者たちにもただ単に冷笑をもって応ずるのみであらう。

4 日本における反ユダヤ主義

目を転じて、日本人の対ユダヤ感情を論じよう。前々節において、ユダヤ・イスラームの二大勢力に接触した日本人の反応パターンを、「ほとんど自らとはなんらの共通点をもたない奇妙な存在として判断停止を選択するか、あるいは過剰な反応を惹き起こして、多数者から見れば特殊奇態ともいえ

る感情の持ち主へと変貌するかのいずれかである」と捉えたが、ここで対ユダヤ認識だけをとりあげるならば、ユダヤ無関心と反ユダヤ≡親ユダヤとに分かつことができるのである。ほとんど大多数の日本人は、ユダヤ無関心派に属する者であるが、反ユダヤ≡親ユダヤという一見奇妙にみえる感情を呈する者が史上間々見受けられるのである。

単に反ユダヤというのではない、またその反対に単に親ユダヤというでもない。反ユダヤと親ユダヤという両極の感情を同一人が具有するのである。この反ユダヤ≡親ユダヤ、すなわち憎悪・尊崇の相反する感情を同一人が併せもつという精神構造。これこそは、前節で述べた 選民 観念によつて惹起されたユダヤ人に対する侮蔑憎悪と羨望感歎との相反する感情を一身に有するというヘブライイスマムの感情表出の、日本における稀有なる事例に他ならないのである。かれらは 腐れる沼地 における極めて例外的な存在である。かれらは、無数に群がれる 浅き小なる民 のなかにあつて 深き教え に近づかんと苦悶する少数者である。そして、かれらは 腐れる沼地 をして良き苗の根づく美田へと化せしめんとする啓示的人物たちなのである。

反ユダヤ・親ユダヤ両様の論者を多数公にしたことにより夙に名が知られる酒井勝軍(一八七四—一九四〇)は、その典型例とも称すべき者であらう。かれが晩年熱心に唱えてやま

なかつた。「日猶同祖論」については暫く措くとしても、生涯にわたるユダヤ民族に対する憎悪と讚美とが共存する論調は、上述の如くヘブライイイズムを奉ずる者における通例として決して理解不能のものではない。酒井は福音に生きる者であつた。終生讚美歌を愛し、その普及に努めた酒井は、内村鑑三の求めに応じその子息・祐之に讚美歌への習熟の手ほどきをしたといふ（内村美代子「内村鑑三の日常生活」(一)(二)「内村鑑三全集」四十巻本、岩波書店「第二十二巻添附」月報「第二十一号」(二頁)を参照せよ)。

その酒井を捉えて「たんなる論理の混乱だけでなく、およそ品位をもつものの節操を欠いた人物であり、特殊な精神構造の持ち主であつたと見ざるをえない。彼の親ユダヤ・反ユダヤを含めた二〇余冊のこの種の書物が版を重ねて広く流布したのは、どういふ理由によつていたのだろうか」(宮沢正典『増補ユダヤ人論考』「新泉社、一九八二(七十六頁)などと評する認識は、やはり 信仰 を有せざる者の近視眼的心性のなせるわざである。彼らに酒井の懊悩はわからない。信仰を貶視する者の手からは、信仰 にかかわるあらゆる事柄がこぼれ落ちてゆくのである。かような研究は、果して何のために存するのであるうか。窮極的事柄 (die letzten Dinge) の把持をめざさぬ 宗教研究 などというものには、一片の存在価値もないのである。他に研究すべき対象はこの世にい

くらでも存するはずである。なにゆえ、信仰 を蔑視する者が、他に行かずして 信仰 の周りを物欲しげな顔つきと足取りで徘徊しなければならぬのであるうか。それこそ「およそ品位をもつものの節操を欠いた」行為ではなからうか。これ以上不謹慎な眼差しで 信仰 とその周辺を凝視し、見当外れな論議を重ねつづけるのはいい加減にしてもらいたいものである。

5 同化と民族心理

ユダヤ民族は、世界各地において独自の排他的コミュニニティーを形成し、他民族への同化を峻拒しつづけてきた。だが、史上唯一かかるコミュニニティーが消失し、他民族のなかへと同化してしまつた事例がある。河南省開封^{カフほう}では、北宋期(九六〇—一二七)より千人ほどの構成員によるユダヤ人共同体が形づくられていた。この共同体は、インドを経由してこの地に至つたとされるユダヤ人により構成されたものであるが、鞏固な民族意識と伝統的生活規範とを堅持し、漢人によるなれば放任とも称すべき処遇を受けつづ、長年月にわたつて存続した。宋朝では開封を東京と称し、国都の所在地であつたため、殷賑を極めた当時の商業的活況に乗じ、このユダヤ人共同体は生活の基盤を得たわけである。そののち、幾度かの王朝交代にもかかわらず、それは、明朝末期の崇禎十五

年(一六四二)の黄河氾濫による開封城水没までさしたる悲劇を招来することもなく泰平を謳歌しつづけた。だがしかし、この六百年ほどの間に、諸王朝の鷹揚な放任的措置に馴致され、多民族への対抗意識を忘却するとともに、自民族の伝統に対する執着をも漸次に喪失していったということが、この共同体が招来した唯一の、なおかつ、致命的な悲劇であったのである。緊張感が薄れた環境のなかで、かれらは民族的伝統觀念をさほど重要なものとは見なさなくなっていた。漢人風の習俗を盛んに採り入れ、漢人との通婚を異とせざるようになり、しかも孔孟の教つるところを奉じ、科擧に挑戦する者も多く現れるに至った。明末の洪水の被害によって生活の基盤を失った多数の者が全国に離散し、破壊されたシナゴークの修復をも深く顧慮することなく、二度と再び開封へは戻らなかつたのは、すでに形骸化し稀薄となつた民族的伝統を生活の柱石とすることに意義を見出だせなくなつていたからにはかならない。開封のシナゴークは、清代の咸豊四年(一八五四)に完全に廃滅した。その周辺に居住していたユダヤ人の末裔たちは、もはやかつての民族伝統の一切を喪失して、形状、精神ともまったく漢民族と同化してしまつたのである。

これは一箇の 信仰 の悲劇である。開封の地においては、ユダヤ禍論者の喋々するいわゆる ユダヤ人問題 はなんら

の苦痛流血を伴わず微塵の 禍根 をも残さずみことに解決されたのだ。しかし、これは悲劇と呼ばずしては、ほかに名付けようもないほどのぞら恐ろしい空前絶後の事柄である。

反ユダヤ意識不在の場では、ユダヤ人のアイデンティティは存続しつづけることが不可能であることを明示する歴史例証として、この開封におけるユダヤ人共同体の運命を観察すべきである。

漢民族における 信仰 觀念については、別稿を設ける必要がある。かれらに 絶対者 に対する意念が欠けていたのではないことは明らかである。日本などと異なり、古来、ヘブライズムのあらゆる潮流が、とめどなき諸民族の移動流入とともに容赦なくかの地には押し寄せてきていたからである。また、いうまでもなく古代においてすでに 上帝 を拝することを知り、 敬天 觀念を有したことは、多数の資料の記すところであるからである。漢民族は、ユダヤ民族が辛抱強く保持しつづけた 選民 という觀念に、なにを見たのであるうか。かの地には、反ユダヤ感情も、親ユダヤ感情も生じなかつた。かの地ではユダヤ人は、ごくありふれたさほど重視するに足りない一少数民族集団であつたにすぎなかつたのである。かの地にあつては、世界の他のあらゆる地域と異なり、ユダヤ人の生態は、漢民族の精神を掻き乱す異性をなんら發揮しえなかつたのである。かの地では、ユダヤ

人が 選民 の矜持をふりかざすことは一箇の背理であつた。なぜならば、漢民族こそは、統治者であるところのかの慍悍なる蒙古ニルン族や、伶俐極まりなき滿洲建州女直をも文化的に併呑し尽くした実績を誇る、堅牢無比、確乎不動なる中華 意識の磐石の上に立脚した金甌無欠とも譬うべき古今無双のゆるぎなき 選民 觀念の享受者だつたからである。

(二〇〇二年五月二十九日)

(未完)